

報告

教養教育における持続可能な社会を目指す体験型学習

大橋 眞, 斉藤隆仁

(徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス 研究部)

要約: グローバル化社会に対応できる人材育成が、大学教育改革の課題のひとつとなっている。持続可能な社会を築くという視点を持つことは、グローバル化社会の問題を理解するためのきっかけになると考えられる。そのためには、地球全体のつながりを考えることが必要であり、全体から物事を考えるホリスティック教育が目指す目標と関係が深い。学生が地域社会人や留学生とグループ学習をすることや、課外活動において国内外の伝統的な農業や医療を体験することなどを採り入れて、ホリスティック教育プログラムを作成した。この教育プログラムを使った持続可能な社会を目指した体験型学習の成果について考察した。

(キーワード: 体験型学習, 持続可能な社会, ホリスティック教育, グローバル化)

Practical study for future establishment of sustainable society as the cultural education

Makoto OHASHI and Takahito SAITO

Institute for Socio-arts and Sciences, Tokushima University Graduate School

Personnel training for global society is one of the important issues for the innovation of university education. A stand point of view for the establishment of sustainable society is considered to have a potential role for understanding issues of global society. To study this relationship, conceptual understanding for global system is indispensable and it closely related to the object of holistic education. Here, we established a holistic educational program consisted with group study by the combination of students, citizens and foreign students. Practical trainings based on the traditional agriculture and medicine are employed as the optional lecture. In this report, we discussed on the effect of the practical study for the future establishment of sustainable society by employing our educational program.

(Key words: experience-based study, sustainable society, holistic education, globalization)

1. はじめに

グローバル化によって、世界中に様々な変化が引き起こされてきた。資本主義による著しい経済発展は、人間の生活を便利で快適なものに変えてきた反面、資源消費は増える一方であり、資源の枯渇が心配される事態を招いている。また、グローバル化によって、貧富の格差がさらに広がるということも、しだいに明らかになってきた。資源が有限である以上、資源消費に依存した資本主義はいずれ行き詰まるのは必然的な道理であり、これからの社会を予測する必要性が高まっている。これからどのような事態が起こるのかが予測出来ない面があり、大学の真価が社会から問われて

いると言えよう。このような急激な社会の変化に対応できる人材の育成が大学教育の課題であり、そのための教育改革の方向性を探ることが、それぞれの大学に課せられた課題であろう。本稿では、持続可能な発展のための教育(Education for sustainable development¹⁾: ESD) を中心に取り上げ、その問題がグローバル化社会の課題であり²⁾、その体系を概念的に理解するために体験型学習が重要な役割を果たすということ、大学教養教育の中で実践的に検証した。とりわけ地球レベルでの視点から持続可能な社会を考える上で必要となるホリスティックな視点³⁾を涵養するための体験型学習について、これまでの事例を基にして

その効果について考察した。ホリスティック教育は、世界のあらゆるものつなぎから、全体的な視点から物事をとらえることを目標とした教育^{3,4)}であり、単なる断片的な知識の寄せ集めではない。体験型学習により知識の活用を図りながら自身の頭で考えることにより、これまで見ていなかった物事の関係性に気づき、さらなる自主的な学びにつながることを目指している。このような体験型学習を、教養として重要になるテーマに関連して実施するプログラムを、幾つかのテーマ別に用意をする。学習者の興味に応じてこれらを組み合わせて実施することにより、学習者はこれまで座学が中心の学習の中では判らなかった様々な物事の間関係性に気づくことにつながっていくと期待される。このような体験による知の構築が、これから必要となる持続可能な社会を考える上で、重要な意味を持つことを明らかにしたい。

2. 取組について

徳島大学全学共通教育において、地域社会人や留学生と共に学ぶ教養科目の中で、持続可能な社会を築くことを目指した体験型学習の取組の実例と、その取組において期待される成果を記す。

2.1. 世代間コミュニケーション体験

徳島大学において、平成 21 年より大学教育に造詣の深い地域社会人と共に学ぶ授業が開設されている。これらの授業や課外活動において、社会人とのコミュニケーションやボランティア活動を体験する。年代の異なる人と同じ活動を通じて、異なった考え方を知ると共に、生涯にわたって学び続けることの意義を考える機会になる⁵⁾(参加学生数：平成 21 年—28 年 160 人)。

2.2 異文化コミュニケーション実践

インターネットを使ったビデオ会議により、海外で日本語を学ぶ学生と様々なテーマについて、コミュニケーションをする。同じ大学で共に学ぶ留学生とコミュニケーションをすることを通じて、異文化を体験的に学ぶ⁶⁾(参加学生数：平成 20 年—28 年 150 人)(図 1 A)。

2.3 伝統医療体験

海外スタディツアーにおいて、モンゴルやタイ

の伝統医学部を訪問して、グループ学習(図 1 B)やプレゼンテーションなどによる合同セミナーをおこなう。また、病院での研修現場や関連施設を視察すること(図 1 C)や、現地の伝統医療の施術を体験する。日本においては、日本や海外の専門家による講演などを通じて体験的に学ぶ場を設ける(図 1 D)。これにより、現代医療と伝統医療の考え方の違いを体験的に学ぶ⁷⁾。(参加学生数：平成 22 年—28 年 16 人)

2.4. 自然栽培による農業視察

グローバル化に関連した授業における課外活動として、徳島県内の自然栽培農家を訪問して、簡単な農作業の手伝いをおこなう。海外スタディツアーにおいて、ラオスやタイの農家にホームステイをしながら、農作業の手伝いなどをおこなう。また、持続可能な農業について、専門に教育する大学を訪問して、持続可能な農業についての考え方を体験的に学ぶ(図 1 E)。これによって、体験的に近代農業と比較することが可能になり、食材への関心が高まる⁸⁾。(参加学生数：平成 23 年—28 年 20 人)

2.5. 遊牧生活体験

モンゴルの遊牧生活をおこなっている家庭でのホームステイ体験を通じて、伝統的な食生活を体験する。乳製品か肉という限られた食材を保存しながら、生活を営むという知恵を学ぶ(図 1 F)。また、遊牧生活の実際についての話を聞くことにより、大自然と共生しながら生きていくという人間本来の営みを体験的に知る⁷⁾。(参加学生数：平成 22 年—28 年 12 人)

2.6. 異文化交流ボランティア体験

サマープログラムにおいて、短期訪問した海外の学生と共に寝食を共にしながら、もてなしをする体験をおこなう。また、課外活動を通じて留学生をサポートすることを体験する。ほぼ同じ年代の留学生との交流を通じて、異文化を学ぶと共に、共通の文化に対する気づきができる。これによって、世界の人々のつながりを感じると共に、様々な文化が生まれた背景についての関心が高まる。(参加学生数：平成 24 年—28 年 90 人)

3. 結果と考察

これからの大学教育改革において、持続可能な社会を築くための視点を育成することは、重視されるべき課題であろう。大学入試が知識を重視する傾向にあるために、学生は、大学入学後も知識中心の学習を続ける傾向が見られる。学生の課外学習の時間を確保することが、大学教育改革のひとつとして広く実践されてきたことにより、自主的な体験型学習の時間を確保することが難しくなっているという面もある。そのために、体験型学習を授業において実施するとき、課外活動における体験型学習を、これらの活動の成果を

授業の成績評価に組み入れることも、やむを得ないと思われる。

3.1. 授業における体験型学習

このような問題点を踏まえた上で導入が可能な体験型学習を検討した結果、授業時間において体験型学習を採り入れる試みを行ってきた。そのひとつが、「地域社会人を活用した大学教育改革」であり、幾つかの教養科目において地域社会人がボランティアの形をとりながら参加している⁵⁾。この活動に参加している地域社会人は、次世代を育成するというボランティア活動としての生涯学習としての意義を感じながら、生涯にわたって



図1. 教養教育における持続可能な社会を目指した体験型実習の実例

A. 教養教育における留学生と地域社会人を交えたグループ学習 B. モンゴル医科学大学におけるグループ学習 C. タイ王国チェンラーイラパチャット大学伝統医学部の製薬工場見学 D. モンゴル伝統医師と日本の柳生心眼流師範による伝統医療体験 E. マレーシアサバ大学持続可能農学部における農場見学 F. モンゴル遊牧生活における伝統的な食文化を体験するためのホームステイ

学び続ける高いモチベーションを有している。この活動に参加している生涯学習者の大多数は、数年にわたって継続されていることや、授業において生涯学習の意義を熱心に語る姿からもうかがい知ることが出来る。学生は、これらの社会人とコミュニケーションを取るだけでなく、あるテーマについて社会人と意見を交わすことを経験する。この様に、授業時間における地域社会人との交流を通じて人間関係を構築した後は、課外学習においても、学生と地域社会人が自主的に活動を共にするという光景をしばしば見ることが出来る。

このような地域社会人の役割を、留学生や海外の学生に置き換えて実施する授業を導入する試みも行ってきた。日本の大学で学ぶ留学生は、一般的には勉学に対する高いモチベーションを有している。また、日本人学生とのコミュニケーションの機会として、意欲的に授業に取り組む姿も見られる。これらの活動で知り合いになることにより、課外活動を共にするモチベーションにつながっていく。実際にこれらの授業の受講生は、知り合った留学生とその後も交流を続ける事例や、スタディツアーによる海外の大学訪問活動への関心が高まる事例も多い。

3.2. ESD としての体験型学習

持続可能な社会のモデルとして、自然栽培やパーマカルチャーの取組を体験する機会に、授業で交流した地域社会人や留学生が参加することにより、体験学習の効果がより高まる効果が期待できる。課外学習における体験の場においても、地域社会人や留学生は積極的に活動に参加する傾向がある。この事実は、活動後の授業などにおいて、課外活動の意義について熱心に語る姿につながっている。学生はこの様なモチベーションの高い共同学習者の後ろ姿を見ながら、体験学習をする機会を得ることになる。

今日の著しい経済発展が、化石燃料に依存している限りにおいては、やがては枯渇するという運命にある。また、原子力発電は、放射性廃棄物を生み出すことが避けられない以上、持続可能な社会を築く上で障害となることは自明のことであると思われる。資源のリサイクルにおいてもエネ

ルギーが必要であり、エネルギー問題の解決が持続可能な社会のために不可欠である。グローバル化により近代化される以前の世界は、それぞれの地域で自給自足的な社会を築いていたために、資源の消費もある程度の歯止めがかかっていた。グローバル化により、化石エネルギーが大量に使われるようになった結果、持続可能な社会から次第に遠のくという事態が起こるようになった。

ESD の概念が出来たのは、1992 年の国連地球サミット「環境と開発に関する国連会議」において、持続可能な開発がテーマとなったことに端を発する¹⁰⁾。その後、2002 年「持続可能な開発に関する世界首脳会議」において、持続可能な開発のための教育 (ESD) の必要性が提唱された。ESD は、「環境、貧困、人権、平和、開発などの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動」としている。ESD には、様々な解釈があり得るが、地球レベルからの視点をもって考える点においては、グローバル教育の一環として捉えることができよう。スタディツアーにおいて、海外での体験型学習をした学生の中には、交換留学やその他の海外留学への関心が高まり、その後在学中に留学をする事例も多い。

3.3. ホリスティック教育としての体験型学習

ホリスティック (Holistic) という言葉の語源はギリシャ語であり、日本語では「全体的」とか「総合的」と一般的に訳されている。ホリスティック教育とは、ホーリズム (Holism) という思想に基づいた教育であり、近年欧米でも関心が高まってきている。学校教育だけでなく、生涯教育として、ホーリズムに基づいた学習プログラムを用意する事例も多い⁸⁾。このような学習プログラムでは、人が生きていくための自然環境と人間環境を総合的に取り扱いながら、精神的価値観を追い求めることを中心している。この過程を通じて、学習者自身が社会における自己の存在意義を見出して、人生の目的や意味を自らが問う体験をする。その結果、自身の存在は、他の命によって支えら

れていることへの気づきが生まれる。この様にして全ての命のつながりを考えることにより、全ての命への尊厳と、自ら学ぶ姿勢が涵養される^{2,3)}。ホーリズムとは、ある系(システム)全体は、それを構成する部分の集合和では、捉えきれないとする考え方のことである。このように、全体の働きを部分や要素に還元することはできないという考え方は、お互いの要素の相互関係があって、初めて全体の存在になり得るという思想に基づいている。全体の示す性質(全体性)は、部分の総和でなく、部分の関係性が無くては成立し得ないという考え方である。社会の仕組みは、複雑系で動いており、各部分の関係性の理解が社会の仕組みを理解する上で不可欠である。各部分の変動が、他の部分にどのような影響を与えるのかについて思考することは、各部分のお互いの関係性の理解があって、初めて成立する。また、各部分の変動がどのような要因で制御されているのかというような動力学を理解することが、将来予測を行う上で不可欠である。このような部分と部分の関係性の理解には、体験型学習が重要な役割を果たす。この体験を通じて、自分の頭を使いながら自身の知識の整理を行い、部分と部分の関係性についての理解をしていく。

東洋的な思想では、常に全体的な観点から物事を捉えることを基本としている。そのために、東洋思想はホーリズムと深い関係があると言えよう。このようなことから、東洋的な伝統的な農業や医療を体験することが、ホーリズムを理解する上で手がかりになり得ると考えられる⁸⁾。体験により各部分の関係性の理解が重要であると気づくことにより、テーマが違う学習においても、その成果が生かされることにつながっていく。

3.4. グローバル教育としての体験型学習

グローバル教育は、地球的諸問題をグローバルな視野から取り上げ、その解決を目指し、よりよい未来を築こうとする未来志向型の教育として知られている。1970年代にアメリカで始まり、日本には1970年代末に紹介されて、研究・実践が始まり、地球的視野に立つ必要性や地球的諸問題の解決に向けた取組の重要性が唱えられるようになった。また、臨時教育審議会第二次答申

(1986)では、「狭い自国の利害のみで物事を判断するのではなく、広い国際的、地球的、人類的視野の中で、人格形成を目指すという基本に立つ必要がある」とし、「全人類的視野に立って、人類の平和と繁栄、地球上の様々な問題の解決に積極的に貢献」していくことが、教育の目標の一つとされた。

現在社会の課題として、グローバル化による様々な問題が起こり得ることが懸念されている。グローバル化した経済システムは、世界にその影響が広がるという問題がある。経済格差がさらに広まり、不安定な社会を広げるという面がある。持続可能な社会を築くための人材育成²⁾という観点からは、グローバル化する社会に対して常にその方向性を見渡すという視点の育成が課題となる。

ESDを採り入れたグローバル教育として、世界的な環境問題や社会問題においてグローバルな視点が持てるような、幅広い視野の涵養が課題となる²⁾。エネルギー問題や食糧問題を始めとして、地球的諸問題がますます深刻化する中で、グローバルな見方と持続可能な社会を両面から捉える視点を持つことの必要性がとみに高まってきていると言えよう。

スタディツアーにおいて、持続可能な社会を目指す活動⁹⁾について体験した学生は、グローバルな視点で物事を考え得る傾向が高く、学生自身の本来の興味に加えて、海外での体験型学習の成果が反映されていると考えられる。

3.5. 地域社会人や留学生と共に学ぶ意義

教養教育における持続可能な社会を目指した体験型では、学生は地域社会人や留学生と一緒に学ぶことを基本としている。地域社会人と一緒に学ぶことにより、世代を超えた異なった視点の存在に気づくきっかけになる。現代社会において、異なった文化とを感じるものであったとしても、歴史的に見ると何らかのつながりがあることが多い。現代においては全く違う系統に属する言語や宗教などにおいても、長い歴史の視点でみると、共通なものから派生して出来たという考え方があろう。生物の多様性も、進化学的な系統樹がつけられていることから判るように、共通の祖先

となる生物から派生してきたものであると考えられている。このように歴史的に物事を捉えることにより、部分と部分の関係性に対する理解が深まることが期待できる。さらに留学生や海外の学生と一緒に学ぶことにより、このような部分と部分のつながりを考えることの意義が理解しやすい環境になる。これまで、交流が無かった留学生や海外の学生であったとしても、一緒に学ぶという経験を通じて、お互いの人間関係ができることを知る機会になる。このことにより、これまで無関心であったことも、学習者自身との関係性を自らがつくることによって、興味の対象になるという経験をする⁸⁾。その結果として、関係性をつくるのが教養を深めることにつながるという気づき生まれ、更なる学びのための自学や体験学習のモチベーションになることが期待される。

これまでの大学では、地域社会人は生涯学習講座として、一般学生とは別の教室で学ぶことが一般的であった。また、教養科目においては留学生も別教室で学ぶことも多い。一般の講義形式の授業では、同じ教室で学んでいたとしても、お互いに交流する機会はそれほど多くはない。学生が、地域社会人や留学生と交流を深めること自体が、持続可能な社会を目指した体験型学習の機会となるという基本的な考え方に立って、その学習効果をさらに高めるような体系的なプログラムを整備することによって、グローバル社会に対応出来る人材育成につながると考えられる。

4. おわりに

現在と過去・未来とのつながりについて考え、システムの中で、個人がどのように位置づけられ、どのように関わっているのかを捉えることが、自らが学習の目標を定めて、自主的に学習教材を求めていくという体験型学習につながっていく。このような学習者が増えることにより、教養を深める大学教育の学習環境が整備される。体験学習によるシステム思考(全ての物事はお互いに関係し合っ、システムを構成しているという考え方)を通して、これまで持っていた習慣や考え方を問い、自分自身と身のまわりの事象との関係に気づき、次にどのような行動をとるのかを感じ取り、

自らの頭で考えて理論を構築し、その理論を実践に移し、自ら体得した新たな習慣や考え方を身につけていく。このような過程を通じて、事象を多角的に捉え、その全体性を見ようとする視点が涵養されると期待される。教養教育における持続可能な社会を目指した体験型学習は、学習者自身が知識を意識改革の変容のプロセスの中で、教養を深める学びの意味についての概念化を図り、ホリスティックな思考の原点をつくる学びであると総括することができよう。そのために学習者自身の思考力育成が課題であり、体験型学習は必要不可欠なものである。今回の取組を広げていくために、持続可能な社会をめざした体験型学習を、教養教育の体系の中でどのように位置付けて行くのかが今後の課題である。

謝辞

この取組にご協力いただいた海外の大学の教員、および学生、徳島大学の学生並びに授業に協力いただいた社会人の皆様に感謝する。

参考文献

1. Report of the World Summit on Sustainable Development Johannesburg, South Africa, United Nations, 1-5, 2002
2. 大橋 眞・齊藤 隆仁 グローバル教育の課題 「持続可能な開発のための教育」の視点から- 大学教育研究ジャーナル 12, 54-61, 2015
3. 日本ホリスティック教育協会編, 持続可能な教育社会をつくる, せせらぎ出版, 2006
4. ミラー, JP, ホリスティック教育—いのちのつながりを求めて (吉田 敦彦・中川 吉晴・手塚 郁恵訳), 春秋社, 1994
5. 大橋 眞 生涯学習と大学教育の融合から生まれる知の循環型社会構築—持続可能な社会に向けた地域の大学の課題—日本生涯教育学会年報 32, 227-244, 2011
6. 大橋 眞・齊藤 隆仁 :Peer learning を主体としたサマースクールプログラム 大学教育研究ジャーナル 10, 31-38, 2013
7. 大橋 眞・齊藤 隆仁 モンゴル国との学生交流から何を学ぶのか International Student

Conference と医学系実習体験を通して- 大学教育研究ジャーナル 9, 66-73, 2012

8. 辻 信一, 英国シューマツハー校 サティシュ先生の最高の人生をつくる授業, 講談社, 東京, 2013

9. 大橋 眞・光永 雅子・斎藤 隆仁 徳島大学「地域社会人を活用した教養教育」の視点からの開発途上国をモデルとした環境教育プログラム開発の可能性 大学教育研究ジャーナル 8, 76-81, 2010

10. AGENDA 21 United Nations Conference on Environment & Development Rio de Janeiro, Brazil, United Nations, 1992